

「笹川杯全国大学日本知識大会 2016」

感想文



期 日 2016年10月22日、23日

場 所 武漢大学

主 催 公益財団法人日本科学協会 武漢大学

目次

★笹川杯全国大学日本知識大会 2016」感想文

武漢大学 胡益頤.....	2
武漢大学 梁丹璐.....	2
武漢大学 柯偉.....	2
中央財經大学 黃璐.....	3
中央財經大学 凌歡歡.....	4
中央財經大学 趙瑜佳.....	5
吉林大学珠海学院 吳浩.....	6
吉林大学珠海学院 陳佩芝.....	6
湖北大学 任治林.....	7
湖北大学 田靜.....	7
湖北大学 馮悦.....	8
蘇州大学 姜英澤.....	8
福建師範大学 蘆鳴.....	9
吉林華橋外国語学院 鐘潔玲.....	10
上海外国語大学 日本文化經濟学院 沈璐璐.....	11
華中科技大学 舒鈺雯.....	11
鄭州昇達經貿管理学院 邢松林.....	12
鄭州昇達經貿管理学院 李曉敏.....	14
內蒙古師範大学 馬菲.....	14
內蒙古師範大学 喬珊.....	15
吉林師範大学 楊閔曉楠 邢玉豐 段博文.....	16

武漢大学 胡益頤



胡適の言葉に、真理は尽きないが立ち入ることに喜びがあるというものがあります。

学びの海は本当に無限で果てなく広がり、始めも終わりも見えません。中学校から日本語を学び始めたので今年はずっと10年になりますが、学ぶほどに日本語、日本について知っていることが少ないと感じます。笹川杯の準備期間中はよくチームメイトと豆テストを出し合いましたが、本来はごく近くにある東洋のお隣さんが何層もの白いカーテンに遮られ、空白の上に「無知」の2字だけが書いてあるように感じるばかりでした。恐ろしさと驚きを感じました。無知の上に築き上げた熟知感が崩れると、後には果てしない海と見えないほどの遠さがありました。学びの海に漕ぎ出してゆっくり漂っていると、近くには助け合い励まし合う仲間が、前方には導いてくれる先生や先輩がいます。

そして秋の10月、外庭のホールの舞台上に立ってスポットライトを浴びると、シャツは汗を吸い、太鼓をたたくような動悸がして、手がぶるぶるするほど震え、必要な知識がこんなにあり、同じ志の友達がこんなにもいたのかと内心では感嘆していました。

中国ほど日本を理解すべき国はなく、若者ほど交流すべき人はいないと思っています。前途は長く険しい道ですが、たとえ果てしない夜闇が広がっていても、心には火種があるので、少し進むごとに少しの光を得られるでしょう。(中国語原文)

武漢大学 梁丹璐



笹川杯日本知識大会に参加するのは二回目です。大会の設問が幅広く、歴史・地理・経済・文学などが含まれています。後輩二人とほぼ一年前から準備を始めました。個人に対する指定問題もあるため、自分の得意な分野のみならず、あらゆる分野に関する知識を備える必要がありました。自分は高校から日本語を勉強し始めましたが、知識大会を準備するうちに、まだまだ日本に関する知識は少ないと度々思いました。

大会中非常に緊張しましたが、予選と準決勝選で一生懸命戦っているみなさんの姿を見てとても感動しました。自分たちも負けずに精一杯頑張らないといけないと思いました。決勝戦で、分からない質問がありましたが、チームメイトたちで相談し合ってなんとか答えることができました。団体戦で最も大切なのは個人の能力よりもチームワークだと思いました。

今年の大会には中国の日本語学科が設置される大学の5分の1強にあたる106校から参加選手を迎えたと聞きました。冷え込む日中関係に暖流を注いだイベントだとも言えるでしょう。中国と日本は一衣帯水の隣国で、何千年にわたる交流の歴史があります。それ相応の信頼も根っこにあるはずです。両国間の交流は流れる川のように、季節によって水の量は変わるが、決して止まることを知りません。日本語を勉強しているみなさんとの旅を楽しみにしています！(日本語原文)

武漢大学 柯偉



時間は速いものですね。2016年笹川杯日本知識大会が終わってからもう一ヶ月近くたちました。会期中と準備期のいろいろを思い出しまして、胸にあふれるほどの懐かしさや感動の気持ちはまだ抱かれています。

開催日が迫ってきている頃、チームの三人とも大きなストレスが溜まっていました。なぜかという、今回の大会で優勝するのは、主催学校しかも前回の優勝学校という立場で、

「進撃戦」より「防衛戦」的な意味のほうが強く、しかし、防衛はさらに難しいかもしれないからです。このような状況で、ストレスを味わいながらも、大会の準備は止めてはなりません。先生が相変わらず親切に指導して下さり、チームメンバーの間もお互いに励まし合っていました。何よりも、チームワークを最初から重視してきた私たちはいつも助け合い、例えば自分が苦手な分野について、チーム友がたくさん教えてくれて本当に助かりました。準備中は常に自分の知識不足を意識して恥ずかしいと思ったときもありましたが、先生とチーム友、そして本やネットのおかげで、日本に関する知識が日々の積み重ねでだいぶ増えてきて、心から充実した感じがしました。

ようやく大会の当日になりまして、チーム友が激しい競争を潜り抜けて個人戦の一位を取った瞬間、とてもうれしいと思いましたが、すぐに未知の団体戦に入ることさらに緊張していました。幸い、チームごとに作戦区に立った後、チーム友と一緒に進行係の話を聞くにつれて、だんだん落ち着きました。その後、個人指定質問を無事に答えることができ、自信は少し増え、心強くも感じていました。早押しクイズのタイムに入ると、すぐに「激しいな」と思いまして、最初の5問でできるだけ得点を増やそうと頑張っていました。その結果、二位との得点差が少なくない先頭チームになりました。しかし、それは最終ではなかったもので、油断をしたら一位が奪われる可能性はまだありました。そのため、私たちは上位にいるチームの得点状況を注意しながら、必要なときはまた知っているクイズを捕まえて答えようという作戦方略に調整して最後まで一位を守ってきました。長い防衛戦がついに終わり、最終結果が発表されたとき、「イエイ、ちゃんと守れた！」と心の中に叫びながら、ほっとしました。

受賞する時、日本財団の尾形武寿理事長はまず私と温かい握手をしてから、きらきらしている金トロフィーを渡ってくださいました。トロフィーを持っているまま写真を撮っていただいていた間、受賞のうれしさはいうまでもなく、トロフィーが重いとも思いましたが、やはり尾形理事長と日本科学協会の大島会長をはじめとする日中友好を目指す方々への感謝の気持ちは最も強かったです。

今回の笹川杯を通して、日本に関する知識が増えたとともに、私が日中友好交流に対する理解も深まりました。友好関係を築くには、お互いへの理解は不可欠であり、そして理解を深めるため、相手国の社会文化に関する知識をよく知っておくことはとてもいい手段だと認識しました。日本人にしても、中国人にしても、日中両国をよく知ってから自分の固有の考えを直したほうがいいかもしれません。

最後に、これから笹川杯も年々順調に開催されるように、日中友好の未来がますます明るくなるように祈っております。(日本語原文)

中央财经大学 黄璐



賞状と日本への招待状を受け取った瞬間、ゴールに着いて肩の荷が下りた感覚、そして未知の分野への扉を開く期待でいっぱいになりました。笹川杯全国日本知識大会への準備と参加は、私にとって扉を開き続ける過程でした。次々に出会う扉を開いていくのに一体どれだけの力が必要なのか、最初は分かりませんでした。ただぼんやりと、日本の膨大な知識体系に通じているということだけ分かっていました。そこでの知識が、語彙や文法の学習に没頭していた私にはっきりとした日本のイメージを描いてくれたのかもしれません。

初戦の会場では、観戦しながら手元の資料を復習していました。スクリーンに見聞きしたことのないテーマが映し出されると、思わず慌ててしまいました。時間が経つほど「わが生や涯りあり、而して知や涯りなし、涯りあるを以って涯りなきに随う、殆き已」という荘子の言葉が頭にがんがん響いてきました。手元の資料を見て、頭にある日本の知識を搾り取ることに尽くしていると、無力感がどんどん強くなっていきました。日本のさまざまな側面を全面的に深く理解するのは恐らく一

生かかっても難しいことでしょう。しかし、大会に参加しての収穫が驚嘆と感慨だけというのではあまりに満足できません。

参加の準備を思い立つまでの自分は、教科書で満足している日本語学習者に過ぎませんでした。日本語のレベルが限られているため、日本のニュースを眺めても見出しをざっと読むだけで、細かく見る勇気も根気もなく、まずは学習に没頭していればのちのちおのずと日本を理解できるだろうと思っていました。しかし、予選に出てからは、気後れするほど分からない資料を無理に読み、一字一句の読み方を調べて繰り返し覚えざるを得ませんでした。それまで避けて通っていた日本のニュースもコピーして保存し、一語ずつ読みました。さらに、興味がなく何も知らない分野についても急いで入門し、関係する知識を蓄えなければなりません。見慣れない難しい字句、学術性の強い文章、知らない分野は重い扉のようでした。大会のために無理して扉を押し、それまで想像もしていなかった世界に足を踏み入れたからです。大会前にふと気づきびっくりしたのは、日本語の漢字の読みがおおよそ推測でき、都道府県の位置が頭に入っており、それまで能力の及ばなかった長文を読めるようになっていたことです。知らず知らずのうち、日本語学習の中でうろつくのをやめ、日本の社会文化をぶらぶら歩き始めていたのです。大会の結果がどうであれ、大会に向けた努力は実を結んでいたと言えます。また、こうして力いっぱい道の分野の扉を開く姿は、日本に近づき、日本を知り、日本を理解して「知日派」になる上でも必要なことでしょう。

受賞して日本へ行くという扉も目の前で少しだけ開いています。この扉を開いたら日本はこれまで見たことのないどういう姿を見せてくれるのか期待していますが、その後に続く新しい分野の中でまた新しい扉を見つけ、開き続けながら「日本ってこうだったの」と感嘆し続けることにも期待しています。(中国語原文)

中央财经大学 凌歆歆



日本知識大会に参加したいと思ったのは何故かという、106 大学 300 人以上の参加者それぞれでしょうが、自分は専門性を高めたかったからです。

2016 年の春、中国でまだ日本語専攻 2 年生ながら明治大学へ交換留学に行ったことをよく覚えています。かなり長い間、講義中に日本語を口にできません。日本語会話が下手ではないか、また学んだ知識が浅いのではないかと心配だったので、日本の学生たちの前で自分の考えを表現できなかったのです。ですがある日、A さん B さん C さんの日本学生 3 人と『万葉集』についての PPT を作って討論していたとき、A さんが PPT の背景を桜にしようと提案して「桜が日本の代表だから」と言いました。それを聞いてびっくりした私は小声で「萩か梅の花にしたほうがいいですよ、確か『万葉集』に桜はあまり出てきません」と口にしました。みんなで調べてみると、萩は 140 首以上、梅は 120 首ありましたが、桜は 40 首ほどしかありませんでした。そのとき B さんが笑顔で「歆歆さん詳しいですね」と言ってくれましたが、C さんの言葉は忘れられません。「流石は日本語専攻！私たちは日本人だけれど専門家に教わることはたくさんあります」

その経験で李蕊先生に教わった「日本語専攻の学生は専門家です。教科書の知識を学び各種の知識も身につけた皆さんは世界のどこへ行っても怖くありません」という話を思い起こしました。専門知識を磨いて専門性を高めることは、日本語専門の学生が共に追い求めて当然のことです。この目標に向かって奮闘したからこそ笹川杯全国大学生日本知識クイズ全国大会と出会い、各大学の学生と「専門能力」を比べる機会を得られたのです。

今年の知識大会は各試合で見事な場面が続出し、血が沸き立つものでした。勝利を確信しているチームは 1 つもなく、消極的なチームもありませんでした。すべてのチームが団結して、全力を尽くして最高のパフォーマンスを見せました。選手としても観客としても、それぞれに深く感動し

ました。この大会を通じてチームワークの大切さをより理解することができました。自分が中日の友好的交流の橋になれると放言する勇気はありませんが、橋を架けるには基礎からなので、その基礎になれるよう努力したいと思っています。自分を磨いて専門性を高めるのがその第一歩でしょう。

主催者の皆さん、先生方、チームメイトの皆さん、対戦相手の皆さんに感謝しています。来年の大会も成功を収めますように。(中国語原文)

中央财经大学 趙瑜佳



どの国にもならでの歴史と民族文化があり、時間が経つにつれてその中身がより豊かになっていきます。

10月22日～23日、武漢での笹川杯全国大学日本知識大会に参加することができました。「より多くの人に日本を理解してもらおう」初志のもと、全国日本知識大会はこれまで12回開催され、今回は全国106大学の学生と出会いました。今回の日本知識大会の内容には日本の文化、風習、社会、歴史、文学などが含まれ、出題対象となる時代も長く、ディテールに注目した問題もいくつかありました。浅い知識しかない私にとっては間違いなく難度が上がっていましたが、同時に次回のヒントにもなりました。自分が興味を持った問題についてだいたいの内容を知った上で事物とその背景の理解を深めればいいのです。ただ、問題が難しいほど参加選手のレベルも現れやすくなります。「山の外に山あり、人の外に人あり」の意味が身にしみて分かりました。特に武漢大学の選手の活躍が目立ち、私が今まで聞いたことのないテーマにも自在に答えており、さながら生きる「日本百科事典」で、会場の観客も参加選手も思わず拍手するほどでした。それも「舞台上の1分間に下積み10年」と言われるように、彼女のすばらしいパフォーマンスの背後にはきっと人の数倍の努力があったはずです。知識の蓄積は一朝一夕にはできません。ふだんの努力があるから、彼女は首位の座を守ったチャンピオンの名に恥じないのです。

今回大会は知識比べであるだけでなく、精神とチームワークの試練でもありました。個人戦でも団体戦でも、出された問題が分からなくてがっかりして慌ててしまうことが多くありました。しかし持っている知識で排除のできる問題もいくつかはあったのです。他の人の問題が簡単で自分の問題が難しいと思って焦る必要ありません。冷静沈着に集中して自分の問題に答えることこそが重要なのであり、団体戦ではチームメイトとの協力も非情に重要です。

達人と勝負できて幸いでした。今回大会では十分に参加でき、大会の楽しみを享受できました。問題に正解したときの喜びと笑顔があれば、不正解のときの無念と後悔もありましたが、それでこそ人生でしょう。浮き沈みあり、上がり下がりあってこそ充実するというものです。

今回大会で日本の文化や知識をより多く知り理解することができ、また日本のさまざまなことについてもっと知りたいと刺激を受けました。海に投げ込まれたスポンジのように、くみ取れるだけたくさんの水分を吸収し尽くしたいと思うのです。これが文化の魅力なのでしょう。深海魚になって心ゆくまで文化の海を泳ぎ、たくさんのまだ知らない領域を探索し見つけていきたいと思っています。(中国語原文)

吉林大学珠海学院 吳浩炜



知識大会は終わって数日が経ち、今その時のことを振り返ってみたら、再び一等賞を得た嬉しかった気持ちを思い出しました。

決戦後、団体一等賞をもらってどう思うのかと聞かれて、急な質問で何も考えることができず、ただ簡単な一言で会話を済ませました。その後、ホテルに戻ってまた先ほど受けた質問を頭の中に浮かべました。そうだね、どうして勝てたのかなと何回も何回も自分の心に聞いて、まるでタオルから水を絞ろうとするように答えを考えていました。ついに、答えが出ました。それは強いライバルがいるからです。強いライバルがいるからこそ、一瞬でも油断することを許されず、必死に目の前にある難関を乗り越えて、最後チームへの勝利にたどりつけたのではないかと思います。戦争の話で言えば、ほかのチームと競争する場はまさに戦場です。どうやってこの戦いに生き残るのか、どうやってタイミングを狙い勝負をかけるのかを私たちは考えていました。こんなたくさんの強いライバルの中を突破し、チームの信念を貫いて賞を取ったのは感激としか言いようがないです。

今回の知識大会を通して、日本に関する情報を幅広い分野まで集め、吸収することで、日本をさらに知ることができましたし、もっと日本を知りたいという気持ちも徐々に強くなってきました。それが日本文化をより近い距離で触れられることとなり、中日両国の交流の土台でもあります。また、日本語を専攻している学生たちに出会って、それは学校と学校との交流であり、そして自分の馴染んだ場所を離れて、新たなライバルと競うことはこれからの日本語の学びに、さらに自分の成長に、役に立つのではないかと思います。一番意義のあることはやはり自分を受け入れてくれる母校のために努力することでしょう。学校の影響力を拡大し、もっとみんなに知ってもらうのに力になれることは最も光栄です。

それに、いい勉強にもなります。武漢大学の参加選手の見事な正解ぶりに感心させられました。圧倒的な実力で、会場でのみんなの心を奪っていました。彼らの姿を見て、自分の修業がまだまだ足りず、もっと頑張らないといけないことを自覚しました。決戦が終わって、隣から握手を求められたことにも感動しました。ライバルの勝利の喜びを心から祝うという心広さはどんなに素晴らしいことだろうかと感じました。

今回知識大会に出たことは私にとってまさに夢みたいなことです。今この夢から醒めて、まだ夢を見た時経験した喜びを味わえました。しかし、嬉しかった瞬間に満足して、これが最高だと思ったら、それは終わりののではないかを意識しました。自分の先がまだ遠いところにあります。だから、楽しんで、感動してから、私は再び旅に出ます。(日本語原文)

吉林大学珠海学院 陳 佩芝



色とりどりの学生生活がまさに終わるといえるとき、私は幸運にも学校の代表として、笹川杯日本知識クイズ大会に参加し、優れた成績を得、団体戦で日本招聘の最後の一枠を獲得しました。あまにもうれしいから、試合から退場して、自分の席に戻ってから、思わず涙が出てきました。振り返ってみると、この大会のために、辛さも楽しさを含める時間を過ごしました。パートナーのお二人がずっとそばにいられて、本当によかったです。そんなに素晴らしい人とチームを組むなんて、私の光栄です。お二人に誇りを持っています。今回の大会をきっかけに、知日派となる私たちは中日友好に重大な責任があると思います。この交流の橋が私たちにより、もっとしっかり築かなければならないと思います。自分もこの度に出会ったすべての物事を一生に一度だけの貴重な記憶として深く心に刻んでいます。これは「一期一

会」と言えるでしょう。また、劉玲先生のご指導のおかげで、私たちに多くの御貴重なご助言を賜って下さいました事に対し、ここに記して心より感謝の意を表します。このような文化交流は必ず両国の明るい未来に大いに役立つから、永く続くように願っています。(日本語原文)

湖北大学 任治林



湖北大学が笹川杯日本知識大会に参加したのは今回が初めてです。こうした競技経験のない私たちにとってはすべてがゼロからのスタートでした。結果的に好成績を収めることができ、驚きと喜び、感謝、今後の大会へのあこがれと自信でいっぱいになりました。

我が校は笹川杯日本知識大会に参加したことがなく、大会の流れ、知識の準備する範囲もよく分からないため、自分の力が及ぶ限り網を広げ、各方面の知識を集めるしかありませんでした。準備の過程も非常に大変で、どの参考書を使うか、どこのサイトを見るか、ポイントをどこに絞るか、進めながら確認するほかありませんでした。

準備から大会終了までの長い間お世話になった引率の先生はクラス主任の梁青先生です。知識大会に関する情報の収集や、出場戦略を立てるなど、プレッシャーをかけることなく励まし続けてくださって、とても感謝しています。チームメイトにもとても感謝しています。彼女たちが励ましてくれたおかげで安心して大会に臨め、彼女たちがいなかったら勝利もありませんでした。

団体戦で最も重要なのはチームワークと組み合わせです。各人の長所を利用してそれぞれの任務を合理的に配分しました。大会では1点も落とすことはできないので、とても慎重に臨み、特に早押しコーナーでは得点できなくとも失点しないようにしていました。決勝の前に先生から同点の場合について聞いていましたが、実際それが自分に起こったときにはやはりドラマティックな展開に挙措を失ってしまいました。私たちは1つのチームなので、自分の選択に向き合う勇気があります。

日本語を学ぶと同時により多角的な学習も非常に重要です。日本語以外にも日本の文化や国情も私たち日本語学習者がしっかり理解しておくべきものであり、多方面の学習を通じてこそ、より柔軟に日本語を把握し運用できるようになります。(中国語原文)

湖北大学 田静



今回はじめて笹川杯日本知識大会に参加させていただいて、本当に感謝しております。湖北大学の名を背負って全国規模の大会に出ることに責任感やプレッシャーを覚えました。しかし、私のそばに二人の友達が一緒に戦ってくれた。決戦まで進出できたのはチームワークのおかげだと私たち三人も引率の先生も思っています。馮さんは早押しゲームのボタン押し担当で、一回もミスしたことなく、うまくクイズの解答権を取りました。任さんは三人の中で一番準備を重ねたメンバーであるため、本場で主にクイズに集中しました。私は大局を見ながら、適切な決定を下すという役割を果たしていました。こういう協力の上で、日本に関する知識を活かして最後まで生き残ったと思います。そして、最後の追加クイズは深く印象に残りました。確信の答えはなかったが、任さんが「うちのチームで答えたい」と言って、すごく悩んでいました。結局は「よし、自分で勝負しよう」と決意し、うちのチームで答えましたが、間違えました。でも、後悔はしませんでした、最後まで友達を信じていましたから。

また、今回の大会を通して、日本に関する知識を得ただけではなく、日本を知れば知るほど本当に魅力的な国だなあと感じて、その魅力にひかれて近づきたくなりました。逆に、よく考えて見ると、

私は中国人であるくせに中国について知らないことや興味ないことが多いという感じがしました。自分の国の歴史や伝統文化などにもっと関心を持って勉強すべきだと思います。(日本語原文)

湖北大学 馮悦



今年の十月に、「日中交流月間」のイベントの一つとした「笹川杯全国大学日本知識大会2016」に初めて参加しました。大学を卒業する前にこのような有意義な大会に参加して、誠にいい経験になりました。

今回の大会は2004年からこれまで最多の106大学が参加したそうです。こんなに大規模で、競争はどれほど激しくなるだろうと私は最初からそのように思いました。参加選手の一人としてますます緊張するようになってきました。また、この大会の問題は日本の文化、歴史などの教科書問題から、時事、アニメ、風習の情報まで幅広い知識問題が出てきて、大変難しいと思いました。私たちのチームの三人とも最初はあまり自信がなく、初戦で落ちるかもしれないと思って決戦まで行けるとは思わなかったです。今から振り替えてみると、このような大会で最も重要なのはチームワークだと思います。先生からの指導に従い、私たち三人はそれぞれ違う分野をきちんと担当しました。任さんは問題に集中し、田さんは大局を把握する担当で、私は早押しボタンの担当でした。特に早押しクイズの時、白熱した状態になったと言えるでしょう。チームの答えによって点数が上がったり、下がったりして、大きな差が広がる場合もありました。他のチームより点数が低い時に、私は少し不安になり、いらいらしてしまいました。感激したこと、チームメイトが私を励ましてくれて、決戦まで進出することになりました。だから、皆が協力したチームワークがあってこそ、うちの大学は二等賞を得ることが出来ました。チームワークの重要さは深く感じられました。

この大会を通じて、日本について多くの知識を知りました。一方、日本について自分はまだ沢山知らないということも分かりました。これからも頑張っていきたいと思います。さらに、日中関係今も緊張している状態で、私たち若者は何ができるのかを考え続けなければならないと思います。(日本語原文)

蘇州大学 姜英澤



2016年10月22日、武漢大学で行われた笹川杯全国大学日本知識大会に蘇州大学の代表として参加することができました。武漢で過ごした3日間は深く印象に残り、学んだものが多く、深く感銘を受けました。

日本知識大会に参加したのはこれが初めてではありません。3年生当時の2015年11月、吉林大学で行われた笹川杯全国大学日本知識大会に参加しています。しかし当時は勉強が足りず、加えて他の選手の実力があまりに優れていたため、団体戦も個人戦も1回戦止まりで、観客として最終チャンピオンの誕生を見守っていました。今にして思えば、当時の心中は少しつらかっただけでなく、満足できない気分のほうが強かったかもしれません。あの時すでに、また参加したいという気持ちが芽生えていました。

その1年後ついにまた参加する機会を獲得し、自分を証明したいという渴望で胸がいっぱいになりましたが、前回の経験から、自分を証明するのは決して簡単ではないことが分かっていました。学習し続けて自分を高めるほかに方法はないのです。チームメイトと歩き出した長い復習の道は、順風満帆になりえないことが決まっていた。多くの困難を克服して大会の日を迎えたのです。舞台上に立ったとき、前回のさまざまな緊張や興奮が今回は落ち着きと集中に変わっていることにふと気づきました。どうしてそうなったのか今から思い返してみると、きっと全身全霊を投じて自分

の最大の能力を尽くして準備をしたからです。準備の過程で汗を流し、知識を得たこの過程こそが本当の貴重な財産で、どんな成績よりも重要だからこそ、平然と結果に向き合えるのです。果たして団体戦ではやはり1回戦のハードルを越えられませんでした。しかしその過程でチームの力は身にしみて分かりました。問題を間違えた人が出ても互いに恨まず励まし合って、前に進み続けました。団体戦が終わり、気落ちしたままの状態では個人戦に参加しました。去年の場面を繰り返しそうになったとき、チームメイトからの励ましが前に進み続ける力となって、続く準決勝と決勝でも、チームメイトが観客席からずっと見守ってくれたことがこの上ない励みになりました。今回の参加でチームの力の巨大さが身にしみて分かり、人と協力することの大切

実際、準備の過程から舞台上上がった後まで、あきらめる気持ちに動いていました。競争があまりに激しく、相手の一人一人が優れた実力を持っている状況で頭ひとつ抜け出すことはあまりに難しいことでしたが、幸い最後まで自分の心の弱さに屈せず通すことができました。実は大会だけでなく、生活中的のどんな時でも、困難や挫折に遭遇してがっかりし、あきらめなくなったときでさえ、果てしない闇に落ちたと感じたとき、改めて自分を通せば、光は近くにあるかもしれません。このことが今回参加して学んだ最も意義のあることで、とるにたりない成績よりもずっと貴重で有意義なものです。

以上が今回大会に参加しての主な感想と収穫です。今回の参加を通じて学んだことは多く、他の選手と競技に臨んだことも、互いに理解を深め、友情を増進でき、交流し合う中から進歩が得られました。今回大会では多くのものが得られ、今後の人生でも永遠に忘れないすばらしい記憶になるはずです。(中国語原文)

福建师范大学 盧鳴



2016年10月21日、わたしは先生、後輩たちと一緒に、福建師範大学外国語学部を代表して、日本知識大会参加のため武漢へ旅立ちました。そこでたくさんの先生方や選手たちに出会って、切磋琢磨してすごくいい経験をしました。みんなレベルの高い選手ばかりだったからこそ、三等賞に入賞させてもらったわたしなど本当にラッキーだなと思っているのです。次に、今度の知識大会に出た感想を言わせてもらいます。

まず、大会準備を担当される方々に感謝の気持ちを表さないといけないと思います。本当に細かいところまで気を配ってもらって、ありがとうございます。ホテルもよかったし、他にもいろいろな人間性のあふれる配慮があって、気持ちよく大会に参加することができました。また、武漢大学のキャンパスの立派さにもびっくりしました。残念なことに、大会中びりびりすぎて、思う存分に見物しようにもできませんでした。(笑)チャンスがあったらまた行きたいですね。

次に、大会に出ること自体もすごく楽しかったです。うちの学校としては団体戦予選突破できなかったのが本当に悔しかったです。わたし自身としては最後まで行って入賞し、先生たちの期待を裏切らなかつたこともうれしかったです。この笹川杯日本知識大会というのは、日本語学習者に日本をもっと知ってもらいたいということで開催され始めた大会だと聞いていたのですが、実際に出てみて、確かにそうだなと思いました。大会に出るために、あらかじめいろいろな復習というか準備をやらないといけないと思って、がんばって準備していました。文学ですとか、歴史ですとか、いろいろありました。最初は大変でしたが、少しずつやっていくことで、日本文学史を全体から論理的に把握できるようになりました。中でも、文学の裏にあった歴史の秘話がたくさん知れて、一層面白くなったかなと思います。「伊勢物語」の主人公の人物像の裏にはなんと在原業平の影があったなんて知ってびっくりしました。また、「経国集」の名前が曹丕の発言とつながりを持つことも初

めて知りました。それは、今大会に出なければ、知るはずのない知識だと思います。それこそ、笹川杯日本知識大会の開催意図につながるのではないかと思います。

最後となりますが、今回日本訪問のチャンスが恵まれて、本当にありがたく存じます。充実した楽しい旅にできるよう、コミュニケーションをいっぱい取って、見学・見物もいっぱいして、いい経験にしてみたいと思います。もちろん、中日友好のために少しでも貢献できるといいなと思います。(日本語原文)

2016年の笹川杯日本知識大会に参加して

吉林華橋外国語学院 鐘潔玲



2015年11月14日、笹川杯日本知識大会が吉林大学で開かれました。私は先生や参加選手たちと吉林大学を訪れ、大会を観戦していました。とても壮観で激しい大会の現場と参加選手達の優れたパフォーマンスを見て、もしその場に身を置いたらどうなるだろうかと思いました。そのとき、優秀な選手達に学んで来年は私も参加すると決心したのです。

当時は3年次に進級したばかりで、最も基本的な日本の概況しか学んでおらず、アニメとドラマにしか興味を持っていませんでした。日本に行ったこともなく、日本の文学や歴史へのなじみはもっとありません。ルームメイトや同級生に参加したいと伝え、この大学のレベルからして非現実的だからあきらめろと勧められてしまいました。そのとき私が考えていたのは、あの舞台に立って、優秀な人たちと一緒に立ちたい、大学の外の世界を見たい、ということだけでした。結果が意に添うものでないだろうとも、試してみたかったです。努力すれば後悔はありません。

心を決めてから、先生のところで手に入れた資料以外の新しい知識は主にネットから仕入れていました。この大会に参加していなかったら、手段を講じてYahoo!JAPANのサイトを見ることも、日本のニュースを見ることもなかったと思います。日本人が何故そこまで野球に熱狂するのかを知るため、アニメからプロ野球まで見て、最後には私も野球が好きになってしまいました。

そのころ自分で決めた目標はベスト16入りでした。しかし筆記問題があまりにも難しくこれは希望が持てないなと感じていたとき、発表された予選通過番号の中に自分の番号がありました。そのとき興奮と感動で複雑な気持ちがこみ上げました。長い時間をかけた努力はむだにならなかったと感じたのです。そしてついに夢の舞台に立つことができました。幸運なことに準決勝で出会った問題の多くが知っていることだったので、順調にベスト8まで勧めました。

決勝当日は来賓各位の挨拶があり、中日文化交流を深めるための偉大な貢献と努力を感じ、熱く誠実な心に深く感動して、卒業後は日本でしばらく生活したいという気持ちが芽生えました。現在もその実現に向けて努力しています。

この機会をくれた笹川杯には感謝しています。おかげで各大学の優秀な学生の実力を目にして、自分に足りないところと今後の努力する方向をつかむことができました。今後、自分も中日交流のための力になりたいと思っています。(中国語原文)



2016年笹川杯日本知識大会が幕を下ろし、思い返してみても喜びと感動が入り交じっています。

去年学部を卒業して大学院に進み、興味から中世文化を研究の方向に選びました。夏休みに日本知識大会のことを知ったときは、ふだん蓄積してきたものを確かめる機会だと思っていなかったため、本当に準備を始めたときは大会まで3か月を切っていました。短い時間でしたが、チームメイトである後輩たちの努力する姿を見て、大学を代表するチームなのだから努力に見合った成績を得なければと本当に感じました。残念ながら全国106大学以上のチームすべてが十分に準備し何度も練習を重ねていたため、不慣れな私たちがよい成績を収めることはできませんでした。先生とチームメイトに支えてもらって個人戦に出場し、自分の最大限の努力を尽くせば心残りはないと思っていました。決勝ではかなりリラックスした気分で、初出場するとき出られなかった場にいるだけで心残りはありませんでした。決勝は私にとって、最後の勝負というより、近い距離で学ぶ経験でした。最終ランク7位の結果は決してよいものではないかもしれませんが、他の選手たちの落ち着いた態度、全面的な知識、的確な戦略も私には収穫でした。

経験を積むことは大会のランクと同様に重要です。そして私がより驚き感動したのは、同じように日本文化を愛好する学生たちと集まって学習の成果を比べ合い、学習経験を交流して、共に日本語を学び日本文化を理解する興味を高めたことです。これこそが最大の収穫でした。

帰ってから来年も挑戦しようとチームメイトに約束しました。来年はもっとすばらしい旅にできることを期待しています。(中国語原文)

あの日々—笹川杯全国大学日本知識大会に参加して—

華中科技大学 舒鈺雯



10月22日は厚い雲に覆われ、冷たい小雨が降っていました。こんな雨の日は久しぶりだったので、猫でも抱えておきたい気分でした。夜明けのタクシーでチームメイトの肩にもたれ、ヘッドフォンでExileの高音をかけ、流れていく灯りを見ながら、眠気を催した神経を刺激していました。明け方の5時半、華中科技大学から武漢大学までの20分余りの間、タクシーが上下に揺れるたび魂が抜け出そうになり、チームメイトには「車と一体化すれば」と言われましたができませんでした。

笹川杯が幕を下ろしてからもう半月になりますが、あの週末はそれほど波乱が印象に残るものではありませんでした。睡眠不足だったからというのではなく、少し緊張こそしたものの、大会のすべてが充実して自然に発生したからです。真剣に会場で問題を見て、静かに食事を摂り、まじめに答え、黙々と幸運はたまた意に沿わない結果を受け入れていました。まばゆいチャンピオン、受賞選手と比べて賛嘆していましたが、改めて考えると自分が差し出したものはあまりにも少しかったです。とは言え、それまでの緊張した予選で得られた知識と感覚が余韻を残しています。

実は、今回大会に参加できたのは偶然でした。親友が出国するので途中辞退することになり、出発前に私の手を取って「チャンピオンを取り戻してよ」と声をかけてきたのです。私は参考書を受け取ると「偉そうに」と笑いました。大会よりも、参加したことがすばらしい学習の機会になったと思っています。おかげで大学の最後の1年間をぞんざいに過ごすことがなくなり、日本の全貌に対する体系的な理解を進めることもできました。プレッシャーのかかる任務だと考えておらず、先生も映画『セッション』の教官のように非情で厳しい人ではなかったのが、先生に抜き打ちテストされる

と大変でしたが、学習の過程全体がとても楽しいものでした。学習チームと一緒に暗記を確かめ合い、さまざまな資料を集めて交流し討論しました。知らず知らずのうち朝まで本を読んでいても飽きず、娯楽を全部さておいても退屈せず、頭に充満する知識の鐘の音をお伴に寝ていました。「学習に没頭して『日に日にやつれる』』という目標は達成できませんでしたが、現在の成長と落ち着いて充実した日々は私たちにとって笹川杯からの贈り物です。

「学びてのち足らざるを知る」はいわゆる常識だとは言え、知らないか軽視してしまうことが多いものです。先生から言葉を学ぶのは雑学家になることだと聞いた記憶があります。この大会に参加したことは、ちょうどこの能力を伸ばす機会になりました。地理、文学、経済、政治などを一つずつ注目していくことで、日本の様子が意識の中で次第にはっきりとしてきました。日本、特に文化面に対する興味もますます強くなってきました。笹川杯は私に窓を開いてくれました。これから学んでいく力を導いてくれて、想像の出口にもなってくれて、感謝の一言に尽きます。今年の大会はもう終わりましたが、私にとっては終わらず続いていきます。(中国語原文)

鄭州昇達経貿管理学院 邢松林



今日は自分にとってうれしい 1 日となりました。笹川杯の受賞証書を頂けたからです。授与された証書はずっしりと重く、4 月の努力の甲斐があったと感じました。証書を開き、改めて「笹川杯」の 3 文字を目にすると、大会の現場に連れ戻されるような気がしました。会場みんなからの拍手、大学名が読み上げられたときの喜び、大島会長と尾形理事長からの心がこもった講話、そして熾烈な戦いの場面が絶えず脳内に蘇ってきたのです。

私立大学生である私たちにとって、武漢での 3 日間は充実し、きわめて視野を広げることのできた日々でした。無名な大学なので、その名を聞いたこともない、河南省鄭州市の昇達経貿管理學院にも日本語学習の拠点があることなどまるで知らない参加者さえ多かつたかもしれません。実際は学内で 100 人近くが日本語を専攻しています。日本語の能力をつけるため毎日勉強にいとそんでおり、寸暇を惜しむという点では日本語専攻の学生が学内で一番です。一番に起きて読書をするのも、最後まで図書館に残っているのも日本語専攻です。こうした努力により、勤勉に学ぶ姿勢としっかりした日本語の基礎力が鍛えられています。今年 7 月の日本語能力 1 級試験(N1)では同専攻の 3 年生が 180 点満点という優れた成績を収めました。このことも、確かに普通の人より努力していることを力強く証明してくれています。

こうしたことは外部の人々に何も知られていないかもしれませんが、確かなことは「しっかりと日本語を学ぶのは、将来、両国の文化や科学技術などの交流に貢献するためです。言葉を学ぶ者はいつでも国際人材基準を自らに求めなさい」という先生方の教えを日本語専攻の学生の誰もが忘れず学習の過程で実践しているということです。こうした使命感と責任感に加え、日本語の先生方が心をこめて守り育ててくださるため、本学の日本語専攻の学生は学習意欲に満ちており、学び続け奮闘し続けることができます。

しかし、こうしたことは自分たちしか知りません。自分たちの実力を披露する大きな舞台はほとんどなく、日本語を学ぶ同志たちに知ってもらう機会もありませんでした。なので、本学の日本語専攻の学生は誰もが実力を披露する機会を待ち望んでいました。そしてその機会が遂に訪れたのです。

今年 6 月、笹川杯全国大学日本知識大会が私たちに道を開いてくれました。大学のランクに関わらず、エントリーすれば参加できるという話を知り、みんなが先を争って申し込みました。自分たちの実力を証明する貴重な機会とあって、誰も感情を抑えられませんでした。何段階もの選抜を経て最終的に自分ともう 2 人が参加チームに決まりました。100 人近い学生と大学、専攻の先生

方から寄せられる期待の重さはよく分かっています。それからの 4 か月間、酷暑や秋の寒さに洗礼を受けながら、一刻のゆるみもなく努力して大会に備えました。大会当日まであっという間でした。大会の 2 日間は自分たちにとって大変な日です。全国各地 106 大学からやってくる参加者と戦うなんて、どれほど光栄なことでしょうか。

振り返ってみると、この舞台を築いてくれた日本科学協会と武漢大学の皆さんは、知られないところで懸命に働いていたのだと思います。大会が私立大学だという理由で門前払いをせず、あまたの河川を受け入れる海のような懐の深さで参加させてくれたことに、心から本当に感動しました。また、今回大会を支えてくださったすべての関係機関やその幹部の皆様方の無私なる貢献のおかげで大会が順調に開かれたということにも強く感謝の気持ちを覚えました。

武漢での 2 泊 3 日はあっという間でしたが、滞在や食事の面で手厚い待遇を受けることができました。四つ星クラスのホテルに泊まれるとは夢にさえ見なかったほどです。他の面でのサポートも至れり尽くせりでした。こうした待遇から、日本科学協会や武漢大学などの関係機関がこの大会を重視していたことが十分に分かります。日本科学協会などの関係機関がこの大会のために十分以上の誠意を払い、中日友好交流事業を行っているのだということを深く感じ取ることができました。本当にとっても感動しており、このことに思い至るたび感情の高ぶりを抑えきれなくなります。とても印象に残っているのは 24 日午後のパーティーです。盛りだくさんのご馳走が出されただけでなく、大島美恵子会長が顧文君先生を連れて会場内の先生方や学生たちを回って挨拶をされていたことにも改めて深く心を打たれました。同時に、自分が背負っている期待の重さをより強く感じました。中日の友好を発展させ促進させる事業は自分たちの世代、特に日本語を学んでいる自分たちにかかっていると感じられたからです。振り返ってみると、武漢で体験したすべてに、大島会長や尾形理事長のような中日友好交流の先輩方からの愛と期待が注ぎ込まれていました。今やそのバトンは自分たちの手にあります。この責任を担うことは私たちにとって当然のことです。

2 日間の大会で全国の有名大学と競技を共にすることができました。我がチームは張宝紅先生の引率のもとグループ戦から準決勝そして決勝へと進みました。ステップを上るたびに自分だけでなく本学や先生方からの切実な期待に応えられている気がしました。各ステージで「鄭州昇達経貿管理学院」と呼ばれるたび、この上ない自信とプライドを感じました。あの場で大学名を耳にできるのはなんともうれしいものです。自分たちの努力が認められたように感じ、また自分、専攻、大学のために栄誉を勝ち得たと感じられました。我がチームは最終的に決勝戦 5 位という好成績で武漢の旅にピリオドを打つことができました。

この感想文を書いている今日は 11 月 11 日で、中国では「独身の日」と呼ばれています。いつも本を読んでいる場所で静かに独り、大会に参加した感想を皆さんと共有できればと思いながら書いています。大会は終わりましたが、私たちの中日友好という船は出航したばかりです。大島会長と尾形理事長のお言葉をしっかりと胸に刻み、中日友好交流促進という使命を肝に銘じて、中日友好交流の新たな展開を促すため尽力して貢献したいと思います。武漢の旅、大会に参加した感想、先輩からの教えは人生の重要な財産となり、これからの人生にプラスの影響を及ぼし、これから進んでいく方向をよりはっきりと照らしてくれることでしょう。

最後に改めて今回の笹川杯全国大学日本知識大会を開催しサポートしてくださった各関係機関ならびに幹部各位、先生方に心からの敬意を述べさせていただきます。皆様のお仕事が順調に進み幸福に過ごされますように。笹川杯全国大学日本知識大会がますます盛会となり、また中日友好の樹が永遠に変わらないことを心から願っております。(中国語原文)

鄭州昇達経貿管理学院 李曉敏

本学が「笹川杯全国大学日本知識大会 2016」に参加する機会を下さった武漢大学にはとても感謝しております。本学を代表して今回大会に参加できたことはとても幸運だと感じています。

振り返ってみると大会準備の日々は大変でしたが、すべての努力は報われることを事実が証明してくれました。大会に参加するのは初めてだったので、損得を気にかけすぎ、リーダーを務めた私は自分とメンバーに厳しく当たりすぎてちょっとした衝突まで起こしてしまいました。しかし、後から深く反省して平常心で大会に臨み、大学、先生方、自分の満足できる成績を取めることができました。

大会では全国各地の強力な相手に直面して自分の不足を深く感じるとともに、中日文化交流に尽くす全国各地の情熱を感じ取ることができました。異文化交流は外国語人材の使命だと思っています。文化は言葉にならない親近感を抱かせる存在です。この大会に参加して日本文化への理解を深めることができ、また日本文化をもっと知りたいという意欲が強くなりました。

まとめると、この大会では日本のさまざまな側面に関する知識を学べただけでなく、見識を広めることもできました。私にとってとても大切な経験であり、今後の人生でも非常に役立つものになるだろうと信じています。(中国語原文)

内蒙古師範大学 馬菲

皆さんこんにちは。内蒙古師範大学外国語学院 13 年度入学、漢日クラスの馬菲です。幸いにも内蒙古師範大学の日本語系を代表して 2016 年 10 月 22 日～23 日の笹川杯全国大学日本知識大会に参加できました。今回大会では受賞に至りませんでした。重要なのは私たちみんなが努力して、すべきことはしたこと。それに他大学の輝かしいところを目にすること、105 大学も学生の姿を知ることでもでき、とてもよい学びの旅となりました。

今回大会は、百年余りの歴史を持つ中国で最も美しい大学、武漢大学で催されました。主催者の武漢大学は、大会に参加した各大学の先生方や学生たちのためにとても快適な滞在環境を用意し、飲食条件も整えてくれました。とても行き届いた配慮をしてくれたと言えます。緊張する大会日程の中でも武漢大学幹部各位のご配慮を感じ取ることができました。大会終了後には仲間たちと武漢大学キャンパスの見学もしました。同キャンパスは広さで有名で、バスに乗っても長時間かかるほどですが、至る所に歴史ある名門校の深い文化的基盤を感じ取れました。満開の桜を見られなかったのは残念ですが、キャンパスのほとんどどこでも立派な大樹を目にすることができ、至る所から金木犀の香りが漂ってきて、流石は中国で最も美しい大学という感じでした。また機会があれば武漢大学の魅力を感じに訪れたいと思います。

もちろん最大の収穫は普段の講義では触れられない知識をたくさん学び日本への理解を深められたことです。大会で扱う知識の幅はかなり広く、日本の歴史から地理、文学、社会、文化、風俗習慣、政治、軍事、スポーツ、芸能、経済、技術まですべて関わっているため、準備の過程では各種の書籍を収集して資料として読み、自然と日本のあれこれを少しずつ知ることができました。たとえば地理を学んだときに 2008 年現在の日本で温泉の数が最も多い都道府県は北海道であることを知り、社会文化を学んだときに横綱としての連勝最多記録を持っている力士が双葉山であることを知りました。日本の卓球選手で普段から知っていたのは福原愛だけでしたが、2008 年北京オリンピック開幕式で日本代表選手団の旗手を務めたアスリートが女子卓球選手の福原愛だということは今回スポーツを学んで知りました。なので、今回の大会の準備過程で日本についての理解、知識のどちらにも本質的な飛躍があったのです。他大学の選手の戦いを見ていると、彼ら

の知識量の豊かさと日本に対する理解の細かさに仰天し、まだまだ自分に足りないところ、伸ばすべきところがあると気づかされました。いずれにしてもとてもよい学習経験になりました。

大会が終わってから長い時間が過ぎましたが、その余韻はまだ脳内に残っています。この大会は大学4年間で最も充実し有意義な経験だったと言えます。おかげで知識が豊かになったばかりでなく、視野を広げ精神面を充実させることもできました。強者との対決の中でいい成績を収められなかったのは準備が不十分だったからかもしれません。次回大会では後輩達にしっかり準備し、気力を充実させ、内蒙古師範大学代表として好成績を収めてほしいと思っています。

最後に、笹川杯の主催者と我がチームを指導して下さった塔娜先生のおかげで今回大会に参加する機会が得られ、日本文化に対する興味を強めることができたことに感謝します。努力を続けて日本文化をたくさん知り、十分でこそなくとも日本文化を伝えられる日本語愛好者になりたいと思います。

皆さんありがとうございました。(中国語原文)

内蒙古師範大学 喬珊

今回、武漢大学で行われた笹川杯全国大学日本知識大会に、内蒙古師範大学を代表して参加できたことは光栄であり、大学生活の鮮やかな思い出となりました。結果は惜敗でしたが、たくさん収穫がありました。

今回の大会で、成功に幸運はないということをはっきりと認識しました。2016年の夏に日本語能力1級試験を受けたのですが合格には2点足りない98点しか取れず、ついていなかったせいだと思込んでいました。次の試験は運がよければきっと合格できるだろうと思っていたのです。内心ずっと運頼みのところがあり、努力もするのですが全力を尽くしてはきませんでした。今回の日本語知識クイズ大会の内容は日本の言語、文学、歴史、地理、政治、経済、時事などに関連したものです。そもそも歴史が不得意な自分は、大会当日に歴史問題があまり出ないでくれるといいなとさえ思っていました。結果として「マーフィーの法則」を忘れていました。世の中はとてよくできたもので、歴史の問題が多数を占めていたのです。その時は本当に項羽の辞世の「時は人を待たない」という感嘆が身にしみて分かりました。こうして我がチームは大会に参加しつづける資格を失ったのでした。

その後の決勝では選手達が優れたパフォーマンスを見せ、成功に幸運はないということを教えてくれました。先生でも答えが決められないような問題に対して自信を持って回答しているのです。大会後ある選手に話を聞きに行き、どういう参考書を読んでいたのか質問しました。過去問を元に資料を探し、自分の知識を拡充しただけだとの答えでした。自分が答えられたのは運がよかったただけだと彼女は最後に話していました。このときやっと「幸運は成功者の謙譲語、運命は失敗者の口実」という言葉の深い意味をかみしめました。成功に幸運はないのです。失敗するのは運が悪いからではなく、準備不足だからとしか言えないのです。このことも今回の武漢の旅で学びました。なので、今回の大会を開催してくれた皆さんには特に感謝しています。おかげで優秀な仲間たちと知り合い自分を成長させることができました。

また、引率して下さった塔娜先生にも、先生はずっと世話を焼いてくださり、特に大会後に慰めてくださって感謝しています。決勝に進む道が断たれたと知った瞬間、時間が止まればいいのにと強く思いました。ステージに立つことはどうでもよくて、これでは先生に合わせる顔がないと思ったのです。自分が最初に歴史をしっかり見ておかなかったからどうしようもない事態に直面したことを、後悔さえしました。しかしステージを降りると、先生は笑顔で「大会には勝ち負けがあります、皆さんよくやりましたよ」とおっしゃったのです。負けてしまった後悔を抱えつつも、とても慰められ、失敗したのに光栄だと感じました。慰められつつも、内心ではもう一度チャンスさえあればと思って

いましたが、この世にもしもということはありません。

最後にジブラーンの言葉を自分に言い聞かせようと思います。自分は 7 回、自らの魂を卑しめた。1.向上しようと努力すべきところでへりくだった。2.空虚な時に愛で穴を埋めようとした。3.難しいものと易しいもの間で容易なほうを選んだ。4.過ちを犯しながら他人も誤るということで自分を慰めていた。5.自由で弱々しいのに、生命の強靱さであると思っていた。6.醜い顔立ちを見下げながら、自分の顔を分かっていなかった。7.泥の中で生活し、満足もせずびくびくしていた。

かつて安逸を選んだことで自分に満足できないのを未来の自分に卑しめられないように。(中国語原文)

吉林師範大学 (楊閔曉楠 邢玉豊 段博文)

吉林師範大学、日本語専攻の普通の学生である私が、代表として武漢大学での今回の笹川杯に参加でき、とても光栄に思っています。今回の大会ではベストの水準を発揮できず、

まず、異彩を放ち比類なく絢爛な日本の文化を感じることができました。参加準備の過程で、縄文時代、弥生時代、奈良時代、戦国時代から今日に至るまで、日本人がたくさんの想像もつかないような困難を克服し、華麗と言える文学、芸術を創造し、独自の文明を完成させてきたということに震撼し続けました。茶道、書道、華道の「三道」にはそれぞれ特色があります。宗教の信仰は神道、佛教、キリスト教のそれぞれが同時に存在し、それぞれ異なる作用を発揮しています。芸術面では能、歌舞伎、落語が大いに異彩を放っています。柔道、剣道、相撲はスポーツ界に不可欠なものとなっています。文学芸術では和歌、俳句、小説、映画、アニメなど美しいものがあり枚挙に暇がありません。独自色のある和服、武士道精神、和食には東洋文化の色が漂い、東洋とアジアの文化に明るい色を添える世界文化の重要な一部分となっています。

また、中国と日本の交流はもっと深める必要があると感じました。両国は一衣帯水で文化における互いの影響も千年を超えています。しかし近代以降さまざまな原因により両国間の理解度がやや下がってきました。大学代表としてこの大会に参加でき、たくさんの中日文化交流に力を尽くす人々にお会いできたことは光栄です。日本科学協会や武漢大学のような今回大会の主催者があり、これほどたくさんの優れた日本人教員や中国人の日本語教員、若さあふれる日本語専攻の学生がいることも光栄であり、中日文化交流にとって幸いなことです。これから歩く道はたくさんあります。笹川杯がますます盛会となること、中日文化交流によりよい発展の空間が持てるようになること、中日文化交流のために微力を尽くせることを望んでいます。

最後に、自分にまだまだ足りないところがある、個人の力は取るに足りないこと、どれほどすごい個人でもすべての知識を把握することはできないことを参加の準備や大会本番で深く認識しました。チームの力、チームワーク、補足のし合い、助け合いがあつてこそ、最大の力が発揮できるということです。強いチームを組んで根気よく研究と学習を続け、着実に知識を積み重ね、自らの向上に努力して、チームに責任を負つてこそ、自信を持って好成績を収められます。大会のためというだけでなく、暮らしの中で興味を持って学び続け、日々積み重ねてこそ、大会本番で緊張せず良好な水準を発揮できます。

ともあれ、日本科学協会ほかご尽力くださった団体や人々に感謝しております。今回大会を成功させた武漢大学にも、先生とチームメイトにも感謝しています。来年は上海で再会し、もっとよい成績を取つて、もっとたくさん見聞と知識を増やしたいと思っています。笹川杯がますます盛会となること、中日文化交流が絶えず深まっていくこと、両国が平和に発展し次のステージへ上れることを、心から祈っております。(中国語原文)